

雜 錄

將來社會觀の種々

高 田 保 馬

一

數年前大阪天王寺公園にアイヌ土人の一行を見た事がある。彼等が髯面を振り立て一點の邪氣も無く手を拍ち身振りをして能祭の歌を謡ふのを聞いた時、男の一團が双方に分れて互に背を見せ額に曳綱をあて、地に這ひながら大綱を引き合ひ、勝負終るや看客の投じた幾錢かの銅貨を手にして小兒の如く嬉々たる姿を認めたま時、無限の憐愍と云ひ知れぬ親しみとを感じた。吾人はかのプシユメン、ホッテントットの名前をさく時見も知らず聞きも知らぬ彼等ながら、微なる而も同様の親し

みを感じる。吾人は此愛着を以て自己固有の性癖乃至は偏見から生ずるものとは考へ得ない、人類の心の底を通じて流れたる大なる潮の偶ま我心臟に於て生じたる一の泡、一の波紋に過ぎないと信ずる。成程古き時代に於ては此愛着が狹隘なる範圍を超えず、自己の屬する社會以外のものと呼びて、夷狄と云ひ蠻人と稱して之を敵視した事もあつた。しかしこは當時の社會的事情が彼等をして異人種異邦人を人ならざる獸畜とこそ見れ人と見ざらしめたる結果である。此愛着は常に吾人が認めて人となす全範圍に及ぶ、そが事實に於て全人類

に及ばなかつたのは一に社會發達の階段が一の障
碍となりて、其充分なる發動擴充を阻止したから
である。換言すれば、大なる流は常に全人類の心の
底を通じて湛へられて居る。しかし、種々なる社會
の事情殊に中間的結合（人類と個人との間に横は
る）の緊密は其流通し合同し循環して全人類に對
する愛着となりて現はるゝのを妨げて居た。併し
ながら時は既に近づいて居る、今日の如く文化の
發達したる時代にありては、吾人かの草深き廣野
に立ち沈みゆく弦月を仰いで靜かに人類を思念す
る時、自ら涙の頬を傳うて下るを覺ゆる。文明人
汝にとりて人類は至高なる愛慕の對象であらう、
友人であり而して神であらう。

吾人は素より人類結社狀態の現状を認め得ざる
ものでは無い。軍國主義は獨逸の凋落と共に死滅
し去つたとは考へられぬ、やがては何れかの文明
國に於て其復活を見るであらう。正義と人道とを

標榜す、英國とても其實行する所は最も露骨なる
帝國主義である。其他歐米列強の政策も大同小異、
自國の富強を以て最高の標的となし主眼となして
ゐる。彼等の結社の傾向は一に民族人種等の中間
的結社に向ひて人類的結合に向ふ事極めて乏し
い。此戰爭は全歐洲に於ける社會組織を一變すべ
しとは云ふものゝ、各國はなほ其保護貿易の政
策、軍備の競争的擴張、植民地の壓迫をやめぬで
あらう。勿論世界の實狀は此の如きものではある
が、吾人はかの人類に對する愛着の傾向か萬人の
心の奥底深く流れ躍つて居る事を信ずる以上、必
ずや將來に於て人類の結合、世界的團結が此地上
に實現せらるゝ日あるを認めざるを得ないのであ
る。思ふに今日歐米各國の實際の政策を支配しつ
つある帝國主義的傾向、國家分立の傾向は過去の
社會事情の産物、何時かは新しき社會事情の所産
たる反對の傾向に壓伏せらるゝ時が來るであら

テ。人類に對する愛着の傾向はその充分なる實現を見るまで奮闘と活動とをやめないであらう。

苟くも社會進化の大勢に着目したるものは、吾人の社會の終局歸着點がこゝに存する事を疑はな^いであらう。よし人類的結合と云ふ事が其完全なる實現たるたゞ無窮の將來に於てのみ期待し得べきものであると認むるにもせよ、又はそが考へ得べき近き將來に實現を見るべしと信ずるにもせよ、社會變動の方向がこれに存する事に關しては異論が起り得ないと思ふ。たゞ吾人の社會が如何なる道行によりて人類の結合、世界的團結を實現すべきか、此道行の如何に關しては種々なる見解が存在し得る。社會の進み行きが豫定の意匠によりて統一せられず、雜多なる社會的勢力の反動、相互作用によりて生じ來るものである以上、今日の社會狀態は其進み行くと見ゆる方向の數多のものを藏する。従ひて人々は其着眼する所によりて此

等の方向の一を捉へて之を高調し、將來社會の內容又は針路の全體を律せむとするに至る事、無理ならぬ心の働きである。吾人は今此等の種々なる見解の中、その重なるものを概觀して見たいと思ふ。而して、此等の見解の主張する將來社會の中から如何にしてかの人類的結合が生起し得べきかを考へて見たいと思ふ。政策又は主義としての主張と雖も、その實現の主唱者によりて確信せらるる限り、之を一の將來社會觀として取扱ひたい。

二

吾人は議論を進める前に結合定量の法則とも名づく可きものを豫想したい。それは社會成員の結合の傾向は略ぼ一定したるものであり従ひて一人が一方の社會に入り込む事深きほど、他の事情にして一樣なる限り、他方の社會に入りこむ程度の淺さを免れぬ事、同様に又共存する社會の中一の社會が緊密の程度を加へ行けば他の社會の結合は

自ら弛緩するを免れざる事を意味する。これに就いては他の機會に於て吟味を加へて置いたから茲には其説明を省略したい(「社會學的研究」収録)社會的定量の法則」及び「社會學原理」第三篇社會形態論の中社會形態の靜的相互關係參照)。勿論吾人は之に、如何なる意味に於ても因果法則的の嚴密さを附與せむと欲するものではない、そは只事實の概化に止まる一の經驗律に過ぎぬ、併し複雑なる社會事象の轉變に對して大體上の種々なる目安を附けるには、充分に役に立ち得るものであり、またさしたる誤りもないものであらうと信ずる。

さて此結合定量の法則が前提として置かれると吾人は人類的團結への道行に關して一の知識を得る事が出来る。それは人類を包括する結社が成立する場合に此社會と其要素たる個人の中間に位する中間的結合が其緊密さを失ふと云ふ事である。結合定量の法則の結果として、成員の範圍に於て

最も大なる社會は、その鞏固緊密を加へむが爲には常に範圍の更に小なる社會即ち中間的結合が強度を失ふを要し、同様に前者の創造即ち成立はまた後者の弛緩と相伴ふ。吾人は今茲にその何れが原因であり何れが結果であるかを顧みない、因果の方向が何れであらうとも、二者の結合強度の間には常にかゝる平行的關係の存在するものである。勿論中間的結合は其數極めて夥しいからして、更に新なる大社會の形成せらるゝが爲には中間的結合の弛緩を要するとしても、其何れが弛緩し強度を失ふ可きかは、結合定量の法則によりて何等明にせらるゝ所は無い。併し浪費によりて財を喪失し易き事最も多きものは富者にして貧者に非ざるが如く、結合強度を減じ易きものは大抵極めて緊密なる結合である。而して、過去の事實から見ると大體上、最も緊密なる社會は常に血緣地緣に基いたる自然社會(氏族、部族、市町村、國家、州縣

と云ふが如き、但し此自然社會の名稱は此等の社會の中の一部をのみ意味する様に用ひられる事もある。又は直接間接社會（余の用ひたる名稱、「社會學原理」第三篇社會形態論參照）である。從ひて大社會の形成によりて結合の強度を失ふものは大抵此種の社會なる事を常とする。更にまた、所謂新に成立する大社會として吾人が考察の眼を向けつゝあるものは、常にこの直接間接社會又は自然社會である。而して、此種の社會の結合は著しく其機能に負ふ。然るに新なる大社會の營む機能と中間的結合中直接間接社會の營み來りし機能との間には著しき類似と代替性とがある。從ひて前者の増加は後者の減少を意味し、延いては大社會の成立が必然に直接間接社會の弛緩を誘致する事となる。此二の事情から推して考ふれば、新なる大社會成立の犠牲となりて結合の強度を失ふ可き中間的結合は大抵氏族部族の如き、州縣、國家の

如き、家族の如き所謂直接間接社會の何れかである。と云ふ事が出來よう。而も吾人は更に一步を進めて、大社會の形成は大體に於て直接間接社會の弛緩を伴ふとしても、此等數多の同種の社會中、重に何れの直接間接社會の上に結合弛緩の負擔を課するものであるかを考へなければならぬ。此考察に關してはまた結合分離の比例の法則とも云ふ可きものを豫め提説したい。この法則の内容は一社會内部の結合は常に其社會の外部に對する分離と相比例すると云ふに止まる。一社會の内部の結合が緊密であるだけ、同様の性質を有する他の社會に對して不寛容的非妥協的であり、從ひて其間に激烈なる分離即ち反對を生じ易い。之に反して、一社會の内部の結合が甚だしく弛緩して居れば居るだけ、他の同種の社會に對して寛容的妥協的である、一致の活動に出でて全體の利益をどこまでも主張すると云ふ事が乏しい、從ひて二の社會の

間には反感反對の如き分離の事實が生じ難いのである。よしまた生ずるにしても、分離の強度は微なるを免れない。此事は二の社會が別々に分立するにしても又は相交又するにしても變りは無い、換言すれば、一の社會の成員の一部分が同時に他の社會の成員たる事あるもあらざるも、少しも變りは無い（上に述べたる法則は嘗て團結の内外に於ける結合分離逆行の法則と名づけたる更に廣汎なる法則の一場合に過ぎない。「社會學的研究」收錄「家族の將來と社會の團結」「社會學原理」第二篇社會成立論第二章異質結合論のうち爭鬭の本能に關する説明參照）。如上の法則も固より過去の事實の概括から得たる經驗律たるに止まる、併しながらこれに基いて社會の轉變を律するに別に著しき過誤なきを認める。さて今元の問題に立歸りて考察するに、現在の大社會よりも更に範圍の廣き大社會の成立し得むが爲には、此成立に伴ひて

（成立の原因たると結果たるとは問ふ所では無い）
 一の大社會が他の大社會（の全部又は一部）と融合することを要し、此融合の行はれ得むが爲には大社會相互の關係が分離的ならぬ事、即ち相互間の分離が極度に小なる事を要する。而して大社會相互の分離がかくまでに減耗するが爲にはそれぞれ内部の結合が或る程度まで弛緩する事、結局外部の社會に對する排他性を失ふ事を要する。新なる大社會の成立し得る爲には現在の大社會の内部的結合の緊密さが失はれなければならぬ、若し此結合が依然として緊密なりとするならば、如何に其他の中間的結合は弛緩するとしても、新なる大社會の成立は不可能である。かくて、上に述べ來れる事を概括して考ふるに、新しき大社會の成立し得むが爲には中間的結合の弛緩を要し、此中間的結合の弛緩と云ふも大體に於て直接間接社會のそれであり、直接間接社會の弛緩と云ふも重には現

在 大社會、從ひて新なる大社會の成立によりて最も範圍の廣い中間的結合となるべきもの、弛緩である。繰返して云ふ事ながら、吾人は敢て必ずしも現在の大社會結合の弛緩が新しき大社會成立の原因なりとは主張しない、たゞ其間には不可離の平行的關係があり、前者を伴はずして後者の生じ得ない事を説くに止まる。

此點は久しき間に於ける私の確信である。若し此確信にして誤り無きを得るものとせば、かの人類的團結が成立し得る爲に必要な條件は容易に指摘する事が出来よう。それは現在に於ける大社會即ち範圍の最も廣い直接間接社會の結合の弛緩する事である、卒直に云へば國家の結合の弛緩する事である。人類結合の實現に導く可き道行は其詳細なる規定に於て如何様のものにもせよ、此中間的結合の弛緩を以て其中心の生命とする、從ひて彼の道行の觀察にして此中心を逸したるものが

ありとすれば、それは理論的に價值乏しきものと云ふ事が出来よう。

翻りて過去に於る社會融合の大勢を考へる。吾人は氏族が全機能的社會と見らるゝまでに殆ど一切の機能も吸収し結合の強度また最も緊密なるのを見た。此時一々の機能の遂行を以て其生命とする所謂機能社會は殆ど存在しないと見てもよい。

併し此氏族の結合は此儘にして留まる事を許されなかつた。氏族を包攝する部族が國家をなし國家が進みて大國家となるに伴ひて氏族の機能は一方此大社會上に推し移り他方に於ては更に無數なる中間的結合の上に推し移つた。家族が氏族の機能の幾分を引き受けたる事は云ふまでも無いが、大社會の成員が益々分化し、社會生活が愈々合理化するに伴ひて、早や血縁地縁に基かざる數多の社會が次ぎ次ぎに生じ、此等の社會はそれぞれ營む氏族が一手に掌握し居たる機能の一小部分を營む

か、又は新に發生したる一々の機能を夫れぞれに營むに至つた。家族と雖も其有したる機能のすべてを久しく保持する事は出來ない。其機能は漸次に分散して新なる機能社會の分化を助長する事となつた。而して限りある社會の成員が益々増加し行く所の社會に屬する以上、而して此等の機能社會が地縁血縁の上に立たずして更に合理的なる基礎、文化的類似の上に立つ事多き以上、各社會の包括する成員の範圍はそれぞれ相異にして、所謂社會的錯綜の現象が認めらるゝのである。機能社會の數増加し、社會的錯綜の程度が進むほど大社會の内部に含まるゝ中間的結合はすべてみな其緊密さを失ふ。地縁血縁に基く團體、たとへば家族、地方自治體の如きものとても此大勢の外に立つを得ない。此の如く過去に於ては、範圍の更に廣い大社會の成立が常に其中に包括せられる中間的結合の緊密さを失はしめ、其代りには結合強度の

小なる機能の乏しい無数の社會を新たな中間的結合として成立せしめたのである。殊に大社會の中に包攝せらるゝ最大の中間的結合——例へば國家に吸収せられたる所の部族、氏族、新しき大國家に吸収せられたる舊き國家又は其一部分——は常に著しく其結合強度を失ひ機能の大部分を失つて居る。吾人の前に試みたる提言が過去の社會變動の大勢に就て誤りなきものとすれば、將來然り人類の團結の成立の道行に關しても大體の方針を不すものと許したい。しかし茲になほ注意すべき一事實がある。過去に於て大社會の成立と中間的結合の弛緩との間に平行的關係があつたとしても、それは後者が必ずしも前者を誘致したとは限らなかつた。大社會形成の結果として中間的結合殊に最大なる中間的結合の弛緩したる事も決して稀では無い。征服によりて大國家の形成せられたる曉に其部分たる舊國家は團結機能共に著しく減耗す

るが如きは其例である。然れども吾人は今日、來る可き大社會——人類的結合の形成に關して同様な事實が繰返され様とは考へ得ない。列強の中の一國が全世界を征服する事によりて人類的團結が形成せらるべしとは何人か敢て之を信じようぞ。既に征服によりて大國家の一部分をなせる民族に關してすら、民族自決、民族自治の聲頻なる今日である。世界的交通、文化の普遍的交叉によりて平等觀念のかくまで發達したる今日である。現在の如き社會の事情に於ては、新しき大社會の成立し得る道行も一に成員又は部分となる可き社會の自發的活動に俟たなければならぬ。若し此提言にして許さるべしとするならば、吾人は當然進みて次の如くに説きたい、今日新しき大社會の形成は一に既存の大社會の結合の弛緩、その排他性の減少に俟たねばならぬ、云ひ換ふれば今後大社會の形成は中間的結合の減耗の原因に非ずして結

果たるべきである。

三

究局に於て人類的團結を形成せむが爲に、將來社會の辿り行くと考へらるゝ道行如何、十七億の同胞をのせたる大船は如何なる水路をとりて、永遠に到達せられざる事恐らく極光にも同じき世界的社會に進まむとするのであるか。此問題に對する答解の一例をジムメルに求めたい。ジムメルは他の場合に於て明に之を一の問題として掲げ意識的に其答解を與へて居るかも知らぬが、淺學の自分には之を知らない。今手許にある社會學(Simmel, Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, 1908)の中から、他の問題を論じながら之に説き及べる斷片的文句を綴り合せて其所見を推知しよう。

此點に關するジムメルの考に於て最も注目すべきものは社會の分化、及び之に伴ふ社會の錯綜化

の觀念であらう（此等の觀念に就いては其等社會分化論を是非參照すべきではあるけれども、此書も今借出す事が出来ない）。原初に於て一々の社會はそれ自體極めて同質的のもの、緊密なる團結を有するものであつた。しかし同時にまた社會相互の差異は著しきもので且つ其間の結合的分子は極めて乏しかつた。然るに社會内部における競争の結果として漸次に分化を生じ、成員間の同質性は失はれる。此の如く社會内部の同質性が失はれると、一社會の成員は他の社會の成員の中に相類似するもの、從ひて親和、利害の一致を有するものを容易に見出すであらう、かくして社會としての個性は失はれて個人の個性は加はり、社會的同化の現象が生ずる、社會内部の團結は減じて異なる社會の成員の間に新なる紐帶が織り込まれる（S. 710, 715）。若しジューメンの説明する此傾向にして更に更に進み行くものとすれば、吾人は當然各國

家各國民族内部の分化、成員間の結合の減耗其極度に達し、遂には國家又は民族相互の融合を生じ世界的團結が一步づつ實現せられ行く事を期待しても差支が無いと思ふ。而して此道行の進むにつれて人々の結社は如何なる姿を呈するに至るであらうか。國家又は氏族と云ふ如き地縁血縁による團體が唯一の結社たる姿をなして種々なる機能を吸収し盡す事はやみ、分化せる成員の中相類似せるもの、利害の相一致するものは相結合して所謂部分社會を形づくる、更にすゝみては他の完全社會の成員との間にも此種の社會が成立する。而もかゝる部分社會は成員の分化著しきに伴ひて必然に其數を加へ、所謂社會の錯綜化は益々進むのである。數多の社會は其範圍に於て交叉し、各個人は此等の交叉點を形成して居る。茲に於て今や以前の如く、緊密なる團結と多岐なる機能とを有する一又は少數の社會が個人を吸収する事止み、此等

の社會が其強度を失ひ方面を狭くしたる代償として、新に多數の社會が成立して個人の生活を支持するに至つたのである。而して此社會的錯綜は社會分化と相平行する事實であるからして、否寧ろ二者は同一の進化過程の二側面に外ならぬからして、社會分化の不斷に進み行く事限り無きが如く、社會的錯綜もまた永久に向ひて其進行を續けるであらう (Vol. S. 410—411)。而してジメメルは錯綜化の究局を説いては次の様に説いて居る。客觀的形態と組織とを有する社會が充分多數に存在し、各人格は其多様な各方面に就いて團結し結合的活動を營み得る。『かくて吾人は團體主義の理想に近づく」と等しく個人主義の理想にも近づくのである。何となれば各個人は彼の一々の傾向努力に對して其充足を容易ならしめる所の結社を見出し、『他方に於て個性の特異性は各の場合に於て相異なるべき社會の組合せによりて與へられる。

かくて吾人は云ふ事が出來よう、個人より社會は成立し社會より個人は成立すと。吾人が全人格を以て屬する所の社會の文化の發達に伴ひて漸次に擴大せられると個人は著しく自立せしめられ、緊密の小團結によりて與へられたる支持と利害とを奪はれる。茲に同様の目的を有する人々の任意なる多數が加入し得る團結の確立せらるゝ毎に此人格の孤立の補償が得られる』(S. 429—430)。而して此社會的錯綜化の進行に伴ひて益々廣き範圍の團結が成立し來る可きであるが、其時に於ける全體的结合 (究局に於ては世界的團結となる) と此等の部分的社會との關係如何。

ジメメルが此點に關して如何なる考を有して居るか、は少くとも私自身には明白ではない。併してこれを推知するに足るべき資料は存在しない事もない。『吾人が次の如く云ふのは社會的なるものと個人的なるものとの關係に就いての考の結論であ

る。社會的要素としての人の代りに個人としての
 人、從ひてたゞ人として有する性質が利害の前面
 に現はれる程、彼を其現に屬する社會をこえて一
 般に人たる者に引つけ、人類世界の理想的統一の
 考に近づかしめる所の結合は益々緊密なるべき筈
 である。』併しながら、歴史的事情の如何によりて
 は、新しく結成せられむとする大社會が全人類よ
 りも遙に狭い事はあり得る。例へば、プラトオの理
 想國に於て、吾人は一方に純個人的なるもの、即ち
 各自の人格の完成に關する欲求を認め、他方に純
 國家的なるものに關する欲求を認める、而して中
 間的結合(例へば家族又は地方團體)に就ての何の
 關心もそこに存しない。プラトオが國家以上の大
 社會を心に描かなかつたのは一に當代希臘の政治
 的、國民的事情に基くのである。基督教に於ても飽
 迄個人の靈の價值救濟を中心の生命となすと共に
 基督教者に對する愛着團結を高調する。而も例へば

ツウイングリが總ての基督教徒は同胞なるが故に
 一切の宗派、特殊の結合は廢せられざるべからず
 と云へるが如く、部分社會を斥けながら大社會の
 範圍全人類に及ばず、唯基督教徒に止まるのも同
 様な偶然的事情によるものである(「*the state*」)
 而して若し、此等の歴史的乃至其の他の偶然的事
 情が無い者とすれば、一方に於て個人が益々利害
 や關心の中心となるに伴ひ他方に於て全人類に對
 する結合が生ずるのを見る可きである、また中間
 的結合は愈其勢力と意義とを失ふ可きである。此
 道程の究局に於て、一方個人は利害の中心として
 何等中間的結合の爲に束縛せらるゝ事無く、他方
 人類的團結は形成せられて個人と自體との間に結
 合の存立する事を妨ぐるであらう。併しながら此
 見方とさきの社會的錯綜化と云ふ方面から見たる
 見方との間には一見矛盾がある様に思はれる。即
 ち一の見方によれば一切の中間的結合は阻止せら

れ減耗しゆいてたゞ全人類的團結のみが殘存する、他の見方によれば、多數の部分社會が成立して相錯綜する、即ち中間的錯綜が愈々増加しゆく筈である。併しながら之は外見上の矛盾に止まるのでは無からうか。ジムメル自身『個人の屬する種々なる社會の數は文化の尺度である』と云つて居る。また社會的錯綜化の進むほど個人の個性は強められる事、而して此個性の完成は人類的團結の形成と相伴ひ相表裏すべき事實なる事を説いて居る(S. 411—412)。此等の點から推して考ふれば、部分社會の増加、錯綜化の進行は當然どこまでも持續せられて行くべき運命である。しかしこれに伴ひて人類的團結の形成せらるゝのは如何にしてであるか、又中間的結合の消滅又は減耗と此錯綜化とは相兩立し得る事象であるか。惟ふに錯綜化によりて人類的團結の維持せらるゝのは二の方法によるであらう。一は數多の社會の錯綜その

事が全人類の結合を支持する事である。國內國際に亘りて無類の社會が相交又したりとせよ。此等の社會の一々は鐵條網の如く、人類は恰も此鐵條網によりて結束せらるゝ棒の如きものであらう。一線づゝ線金はそれぞれ別の棒に結びついて居るけれども、それが複雑に相交錯するが故に棒の總體は相固結して離れない。これと同じく社會の錯綜化が進むほど、全人類は結んで離れざる一團結を形成する事を得るであらう。(S. 714の末尾はかゝる解釋を許さないであらうか)。更にまた社會的錯綜の著しき事は其原因又は結果として個性の發達を意味する。各自の個性が發達し來れば吾人の愛着はたゞ單純に人としての普遍性を有するものに向ひて生じうる事となる、換言すれば、相手と如何に差異あるに拘はらず、彼が人たる性質を有するが爲に愛着する、而して此傾向は實に全人類に對する愛着となるのである。個性の

發達甚だしき場合には此事あるを得ない。かくて社會的錯綜化が其究局に於て、全人類の團結を伴ひ得る事は寧ろ自然の勢であると思ふ。次に中間的結合消滅の問題を考へよう。社會的錯綜化が進み部分社會が極めて多くなるとする。社會の數此の如く多くなれば一々の社會の結合の強度は甚だ弱からざるを得ない。またかゝる場合社會の成立は一に成員の合理的選擇的活動の結果によるであらう、從ひて成員は其完全なる個人的獨立を保留しながら僅に一方面の活動を此社會の中に投じ、結社を以て自己の生活の手段とする。事實此の如くであるとすれば、個人を束縛し、個人を以て手段となす様なる結社、成員の個人的利害の單純なる手段たる以外の意味を有する結社としてはや何等の中間的結合も存在しない事となるであらう、かゝる性質の社會としては人類的團結のみが存在するに至るであらう。從ひて中間的結合は

決して消滅し去る事はあり得ない。たゞかゝる意味の中間的結合は當然消失する、また消失するに非ざれば眞に人類的團結の成立を見る事は六つかしいと思ふ。かくの如く考へ來れば、將來に於ける社會的錯綜化の進行の考と中間的結合の消滅の考との間に何等の矛盾も無い。

勿論此外見上の矛盾の事實に於ける調和と云ふ事に關する叙述は自分の推測に基いたるものである、しかしながら自身ではこれを以てジムメル説の誤れる解釋であらうとは信じ得ない。其『貨幣の哲學』に於ても『社會分化論』に於ても文化の發達に伴ふ個人の合理化、社會結合が漸次に一面的となりて人格の殆ど全部を一定の結合以外に殘留せしむる事の増加が力説せられて居る。之は社會的錯綜化を以て社會進動の必然なる運命と見るものである。また文化の發達に伴ひ個性が其明確を加へ行く事と社會の範圍の擴大とは相平行し伴隨す

る事實と考へられて居る。社會の團結が漸次其入さを加へ而も其中に於ける錯綜の程度を高めゆくものと見る上述の解釋は、此等の著作の内容に照しても略首肯することが出来ようかと思ふ。

四

ジムメルに就ては簡單であるがこれ丈で筆を止める。時代の上からは却りて之に先だち思想の系統の上からは之と著しく異なつて居る所のスペインサアの見解に一瞥を投じたい。自分の此選擇は一定の考ありての事では無くたゞ自分の感興を惹くものを順次に列擧するに過ぎないのである。人或はいま時スペインサアの社會學を持ち出す迂愚を笑ふであらう。勿論古いと云はれる點はあるが不朽の著書には永劫に新しい眞理がある、千年前の黄金は今日も亦黄金たるを失はない。

スペインサアの將來社會觀に就いては其著『社會靜學』を參考すべきではあるが、今はたゞ手近にあ

る『社會學原理』のみに據る。スペインサアが産業的社會型と軍事的社會型とを區別したる事は周知の事實である。而して其考によれば、將來の社會に於ては産業的社會型が漸次に重きを占め、現實の社會が(一時的なる例外はあるが)一步つづつ此型に近づくであらう。此二型の區別を一言にして盡せば、軍事的社會型にありては國家全體の爲にする團體的活動即ち意識的協働が生活の廣き方面に亘り、且つ此活動を有効ならしめむがために個人に對する國家の強制は不斷に行はれ云はゞ個人は國家の所有物となる、而して同様の目的の爲に秩序組織の固定を要するからして、人々の關係は生れながらの身分によりて定まる。之に對して産業的社會型にありては國家全體の爲にする團體的活動は戦争のやみ産業が重きをなすにつれて愈々減少し従ひて此活動を有効ならしめむが爲にする國家の強制も極めて小となり、其統制機能は今や何々

をなすべしと云ふ積極的方面を缺いて僅に何々をなすべからずと云ふ消極的方面に止まる。個人の關係を定めるものは身分に非ずして今や自由なる人々に結ばるゝ契約である (Spencer, Principles of Sociology, §§517—574)

戦争が漸次に其跡を地上より潜めると共に戦争の所産に外ならぬ軍事的社會型は其勢力を失ひ、其代りに産業的社會型が益々純粹なる形に於て實現せらるゝを見るであらう。此の如く考へ來ればスペインサアの將來社會觀は頗るジムメルと趣を同じくするものがある。スペインサアは一方明に社會的錯綜化の増進を認めて居る。軍事的社會型にありては社會的錯綜化が極めて生じにくい。『軍事的社會型の他の特徴は國家組織の一部分を形成する者以外の社會組織が全然又は一部分禁遏せられる事である。公的結合はすべての範圍に亘り私的結合を斥ける。』『國家構造の一部に非ざるすべての

構造は多少とも之に對する制限となり、而して要求せられたる無制限の從屬を妨げる。』故に軍事的社會型の特徴は商業的目的のため、宗教的信念を廣めむ爲、博愛的事業の爲めなどの市民の結合の缺乏又は比較的稀少である (Ibid., §§56)。然るに産業的社會型の漸次實現せられ來るに及べば、國家組織の一部分ならざる社會組織即ち結合が生じて來る。『公的社會組織の範圍の割合に狭いのに伴ひて私的社會組織の範圍が割合に廣くなる。一方が明けたる範圍は他方によりて滿される。』『かくて産業的社會型の避くべからざる特性は政治的宗教的商業的職業的博愛的社會的なる大小の社會の多數なる事種々なる事である』 (Ibid., §70)。勿論産業的社會型は外群との關係如何により文化の幼稚なる時代にも或度の實現を見たのであるが、概して云へば、將來の社會に於て益々充分に實現せらるゝであらう (Ibid., §§69)。而して此社會

的錯綜化の増進に伴ひて同時にまた國家間の結合が著しくなる、所謂人類的團結に向ひて一步を進める事となるであらう。スペインサアによれば、産業的社會型にありては經濟的自給主義がやむ。以前一國の各地方が敵對關係にあつた場合には互に自給主義をとつたのであるが、今は國家の統一と共に其事が止むだ。之と同様に各社會が平和的關係をのみ保つ事となれば國際間に於ける自給主義も止むであらう。『産業的制度的下に於て各自は、交易の禁止又は障礙等の個性に對する束縛を甘受しないであらう。』『産業主義の擴充と共に國民間の障壁の撤去、共通なる社會組織による統合の趨勢がある、若し單一の政府の下に立つに至らずとも政府の聯合の下に立つに至るであらう』(ibid., §572)。要するにスペインサアが將來に於て國家機能の衰減、社會的錯綜化の増進、人類的團結の形成あるべしと認めたるのは事實である。

スペインサア、ジムメル二氏の將來社會觀は其詳細に於て又その高調する所に於て種々相異なるに拘はらず。大體に於て此の如く一致したる點がある。而して此見解に認めらるゝ過程は最もよく吾人の前に述べたる中間的結合ことに國家團結の弛緩と云ふ前提を充たすものがある點に於て、人類團結を生じうる事極めてプロバブルのものであると信ずる。併しながら吾人は常に此二氏の見解特にもスペインサアの見解の力説し主眼とする所の個人の自由に存する事を忘れてはならない。而して此自由よりも平等を重ずる一派の人々の將來社會觀並びに平等化の傾向を帯びたる實際の事實に於て、反對者裏切者を見出すのは不思議の事ではなからうと信ずる。吾人は次に此反對者の將來社會觀を吟味し、其の内容と人類團結との關係を考へたいと思ふ。